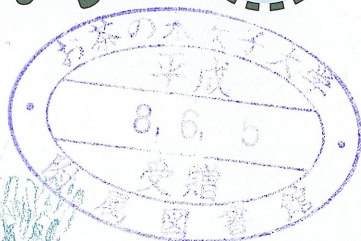


幼児の教育

'96
7月号

家庭—保育所—幼稚園



この実践どこがポイント

◆全3巻◆

新刊

①子どもが変わるとき

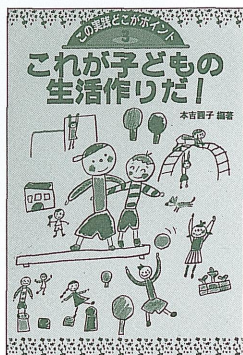
—本気で子どもとつき合っていますか—

②これが子どもの遊び作りだ！

—子どもの素晴らしい発想を見逃していませんか？—

③これが子どもの生活作りだ！

—生活に必要な経験をさせないでいいのですか？—



- 本吉圓子先生の提唱する生活保育論決定版。
- 全国各地の実践から100例をとりあげ、テーマ別に問題点を探っていきます。
- 実践例とポイントの解説により、子どもの見方、対応の仕方を学べます。

本吉圓子 編著

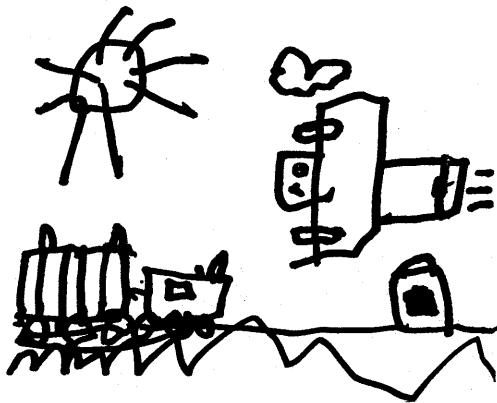


B6変型判 各248頁 定価各1,500円(本体1,456円)

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第95卷 第7号



幼 児 の 教 育 目 次

— 第九十五卷 第七号 —

© 1996
日本幼稚園協会

ある日……………(4)

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(4)

快いことばの体験を豊かに……………吉村真理子……………(6)

黄色い自動車―存在と非存在の問い―……………津守 真……………(9)

震災後の子どもたち(9) 大好き! くるくる滑り台……………前澤美津子……………(14)

「こどもテレホン相談」から(4)

小学生になると悩みは友だちや先生のこと……………小島 直美……………(19)

『十里夢中』―息子たちのイギリス公立校体験記(4)……………豊田 一秀……………(26)

子ども時代と私(2) 昭和、昭和、昭和の子どもよほくたちは…津守 房江……………(32)



声がでない日に思ったこと……………伊集院理子…(38)

ある日の育児日記から(67)……………佐藤 和代…(43)

東欧の子どもたちと幼児教育(2)

ユーゴスラビアの保育の現状と子どもたち……………入江 礼子…(44)

子どもと天文学……………近藤 雅之…(51)

子どもたちへのまなざし(19) 静かにするのが好き……………松井 とし…(54)

外国の文献から『心情と知性の教育—日本の就学前と小学校教育に関する考察』

第一章 日本の教育制度……………洪川明日香…(56)

表紙絵・いわむらかずお「なにかありそうだ」
扉題字・津守 真／扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット・彌永たたえ「かげ」
編集委員・田代 和美／伊集院理子・高橋 陽子

編集部・仲 明子





ある日

撮影・平野 清

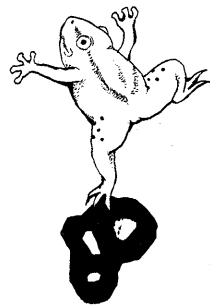


二十一世紀にむけて幼児教育を考える(4)

快いことばの

体験を豊かに

吉村 真理子



あと数年で二十一世紀を迎えようとしている。今の子どもたちが生きていく時代には交通手段もはるかに進歩し、人々が地球上を自由に行き来すれば世界地図もずいぶん様変わりするに違いない。いつまでも国境にこだわり、自分

たちだけの文化の中で生きることが不可能という時代がもうすぐ来ようとしている。その時には、まわりの人々の文化も尊重し共存しながら、気持ちよく過ごす能力がなければ、お互いの文化を理解することも吸収することもできず取り

残されてしまうかもしれない。今、教育に携わっているものもとても大切に育てたいのは人と関わる能力、それも、それぞれの場で出会った人たちと気持ちを通い合わせ、暖かく快い時間が持てる能力ではなからうか。

先日、ある保育所に緊急入所してきたU子（二歳）の様子を担当者から聞く機会があった。まわりの子どもに向かって「ばか」と叫び、近づこうとする子どもには唾を吐きかけるので、他の子どもたちは恐れていたが、保育者が優しく関わっているのを見たり、一緒に他児の仲間入りをしてあそぶうちに、しだいに必要なことば（やりたい、いれて、かして、ありがとうなど）も使うようになってきた。すると他の子どももU子に親しみを見せ、食事やおやつの際に世話をやいたり、やり方を教えるなどす

るうちに、U子の攻撃的な行動は少なくなってきたという。

U子が攻撃的であったのはまわりの子どもたちから「ばか」と言われ、唾をはきかけられていたからである。同じようにして身を守るより方法を知らなかったのであろう。U子が他の子どもと親しくなれたのは、みんなといっしょに気持ち良く楽しい時間を過ごす経験をしたことと、必要なときに適切なことばを使うことを覚えたためであろう。この二つのこと、すなわち相手の状態を理解して暖かく迎え入れることと、お互いの意志を通じ合わせるコミュニケーションの手段を持つことは、二十一世紀を生きるためには欠かせない条件ではあるまいか。

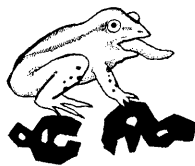
ところが、現実には今なおへいじめVの報道があとを絶たないでいる。みんなが快い時を共

有できないのは、一つには自己中心で相手の気持ちかわからないという想像力の無さと、表現（特にことばによる）の乏しさにあるように思われる。その対策としては、家庭や園での言語環境を豊かにすることから始めたい。子どもは会話によってことばの使い方を習熟していくものである。大人が愛情のこもったことば、興味ある言い回し、おもしろい比喩、わかりやすい表現を常に聞かせていけば、子どものことばは急速に伸びるばかりでなく、親しい人とことばを交わす喜びや楽しみを覚えていくであろう。保育所に入る前にU子がおかれていたような言語環境の乏しいところでは、情緒も思考力も育ち様がないのである。

また、日常会話の範囲を越える豊かな内容を表すことばは、絵本を読んだり物語を聞かせることで子どもたちに伝えることができる。親し

い大人が心をこめて語ることは耳に快く響き、想像の世界を広げストーリーを追いなからさまざまな感情体験をし、やがて他者の気持ち思いやる想像力も育つのではないだろうか。

（元松山東雲短期大学）



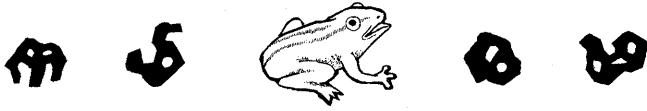


黄色い自動車

——存在と非存在の問い——

津守 真

子どもがどうしてもあることをしたいと言いつ張るとき、それに応えるのには大きなエネルギーを要する。大人はそんなに心身の労を払ってまで応えなくてもよい理由をいくらでも考え出すことができる。しかし人生の探究者であることにおいて、子どもは大人以上に真剣である。真剣な要求は大人も本気で応えることを要する。表現は異なっても、子どもの世界は大人が生きる真実と底辺において共通である。



十三年前の朝、庭で、J夫は玩具の黄色い自動車を砂場のへりに置き、自分は砂場に座ってそれを見ていた。私は少し離れてそれを見ていた。子どもがひとりで何かをじっと見ている時間と空間をたいせつにしたいと思ったのである。そこにT夫が来て、その黄色い自動車を手に取った。私はJ夫が怒るだろうと思ってハッとしたり。J夫はすぐに立って自動車を取り返し、もうひとりの子どもはまたそれを取り返し、二人の間で緊張が生じた。私は急いでほかの自動車をもってきたが、ふたりとも見向きもしなかった。両方とも黄色い自動車に固執していることが分かった。そのうちにT夫は黄色い自動車をもって歩き始め、J夫は白いパトカーを黄色い自動車のあった場所に置いて眺めはじめた。

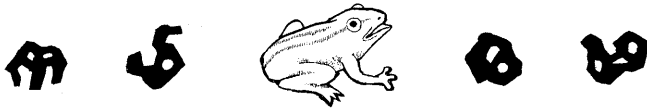
J夫と私とはその前一年以上の付き合いがあり、一見奇妙な彼の行動をどう理解したらよいかを分からないでいた。J夫は大人の自転車の後部荷台に乗るのを好んだ。そのときに自転車の走る場所にじょうろや、やかん、玩具の自動車、シャベルその他の物を置いて、すれすれのところを通過することをJ夫は要求した。それにぶつかったり動かしてはいけない。遠くを通るのでもいけない。だからJ夫を乗せて自転車を走らせるのに付き合うのは大変だった。ときどき小さい子どもの足元にすれすれに物を投げるので危なくて目が離せなかった。かかっているそのときには、理



由はわからないけれども、J夫を自転車の荷台に乗せて走りながらも、こんなに強く欲している子どもの思いをできるだけ叶えたいということ、他の子に危険がないようにすることで精一杯だった。私は彼の激しい行動の裏にあるのは何かを分かりたいという切迫した思いをもった。

この日、J夫は黄色い自動車を砂場の縁に置いて見ていた。特にその場所を選んで置いておけるように思えた。「置く」というのは、自分の手の中とは違う空間、自分から距離を離れた空間に据えることである。ある特別な場合にはそれは床の間や神棚、祭壇など聖なる空間である。この場合には砂場の縁石に過ぎないのだが、J夫にとってはその特定の場所の意味があるように思えた。

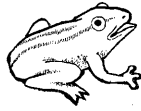
じっと見ているこの子どもには、黄色い自動車だけが見えていて、その他のことは見えていない。よく見ると、砂場の縁石の幅は狭く、ちょっと触れたら自動車は落ちそうである。J夫は自動車そのものを見ていたのではなく、それが縁石から落ちるか落ちないかの境界を見ていた。換言すれば彼に見えていたものは彼の精神生活の中でしぼられた一点で、それは物の存在の確かさについてであるように思えた。私は自転車を走らせているときも同様であることに気が付いた。自転車が物にぶつかればその物は置かれた場所には存在しなくなる。自転車でスレスレのところを走るとき、彼



はその物が存在しなくなるかどうかの境界を確かめているのではないか。

そのころ私は大学をやめる直前で、人間の存在の確かさは何によって得られるかを考えていた。保育の実践の場では、保育者の個人的な事情からはできるだけ離れて、そのときの子どもの代わりに専念することを要するが、その上でなお、保育者自身が探求している課題や関心から自由になることはできない。このときは、J夫と付き合いながらも、彼の中にあるであろう疑問、存在と非存在、beingとnon-beingとの境界にある不安定さを理解するには適した私自身の内的状況だったのだと思う。発達が遅れていると言われことばをもたない子どもは、社会で確立した位置をもつ教師とは全然違った場所に立っている。社会の中での存在感はもちろん、自分自身の存在の確かさも、私共大人とは比較にならないほど薄いだらう。そう思ったとき、J夫と付き合いながらも、彼自身の存在を確かにするのに私がどうすればよいかを考えるようになった。

存在と非存在の危機は、人の生涯のどの段階にも生じる。その危機に遭遇したときにはだれでも真剣にそれに向き合う。結婚あるいは離婚によって生活環境が変わったとき、若い人にも自分の足元の存在感が揺るがされるときがあるだらう。老年期に、社会的仕事を終えて生活様式の変化に遭遇するとき、人は一生涯を見渡して新たなア



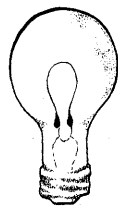
アイデンティティを再び作り直さねばならない。そのような存在と非存在の境界にある不安定さは、人生のどこでも起こるのだが、子どもときには、自分の過去との関係でアイデンティティを見出すのではない。現に生きている直接の周囲の人や環境の中で自分が価値あるものと認められることによって自分のアイデンティティが作られるので、保育者の存在は特別に重要である。

J夫とはこの後更に付き合いは続くが、これから十数年後、彼が造形教室から展覧会に出品した絵に私は魅かれた。絵の具で四角い枠を描き、その縁の内側と外側に沿ってストレスに太い線が塗られていた。自転車で物にぶつからないようにストレスに走った、あのときに切迫感をもって探求した存在と非存在の境界は絵のモチーフとして彼の心に生きている。J夫はいま、言葉と話さないが、文字に書いて意志を伝える、ひとりで作業所に通う立派な青年である。存在、非存在の問いは、人間の生涯のはじめに確かにされることを要し、人生の各段階で新たに確認されていく課題である。

(愛育養護学校)

震災後の子どもたち(9)

大好き！くるくる滑り台



前澤 美津子

はじめに

一九九五年一月十七日未明のあの大地震は完成して四か月足らずの御影保育所の可愛い門もなき倒し、創立二十六周年を数える園舎南棟のジョイントに隙間が空き、ピロティの柱に亀裂が入り、地面に陥没し立入禁止という事態となった。

子どもたちの大好きだった南側畑の中の石燈籠の屋根が見事に転がり落ち、所庭(保育所の庭)の深

くて太い十数本の亀裂は、つい三日前迄の平和でのかたかな保育所の姿とは全くかけ離れたものだった。

お星さまになったK君

自宅の被災もそこそこに、交通遮断の中、徒歩で、自転車、何とか自力で出勤した職員は子どもたちの安否確認の末、悲しみのどん底に陥った。我が保育所六十三世帯のうち全壊焼十世帯、半壊焼十七世帯、一部損壊三十一世帯という被災状況の中、

○歳児のK君の自宅では、若い母親がかばうように上になり、母子共に亡くなったのである。

K君の死顔は傷一つなく、今にも息を吹き返し片言で語りかけてくれそうな表情だったそうである。

引越、そして再開

職員は悲しみに暮れるゆとりもなく、働きたくても子どもを預けなくては働けない保護者の為、生活の立て直しに心を砕く保護者の為に、御影で保育再開できない代わりに東灘区内、区外、神戸市外の各保育所に子どもたちを緊急特例入所児として受け入れていただくことになった。

その後のアンケートで把握できたことだが、その当時の子どもたちの家庭での変化には、おねしょ・チック・夜泣き・赤ちゃん返り・物音に敏感・暗くすると眠れない・トイレに一人で行けない・恐がって家に入れない……等、多種多様な心の変化があり、保護者も職員も一日も早い御影保育所の再開を

望んだものである。

結局、元の園舎の補修工事の間、他の空家となった近隣の保育所に、そっくり引越して新年度四月からの保育再開となった。数えて、あの震災の日から二か月半を経過していた。



▲畑の中の屋根の落ちた石燈籠

廊下をぐるぐる

仮住まいの保育所は御影とは違い、木造で中央のトイレから廊下伝いに各保育室他、全室に行き来ができるという小じんまりとした楽しいたずまいであった。但し、廃棄寸前の建物なので喜々として走り回る子どもたちの歓声と木造のきしみと揺れは毎日、「余震」そのものだった。

住めば都……よちよち歩きのお歳児が廊下伝いに年長児の保育室に遊びに行くかと思えば、兄妹同士で遊びや給食の途中でも交流できるアットホームな雰囲気は、震災後の不安この上ない子どもたちの精神状態をサポートするのに最適であったかもしれない。

子どもたちの姿

子どもたちは安心して自分そのものを出しきっていた。

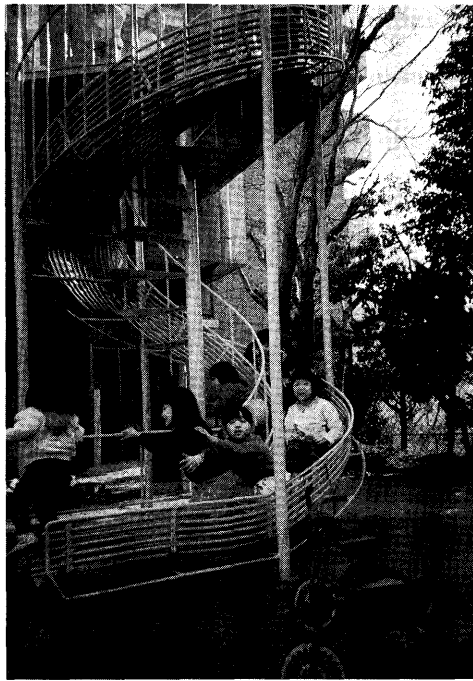
コーナー遊びのままことから突如始まる「地震ごっこ」。砂場での穴掘りが「ガス工事ごっこ」。所庭のベンチや大カゴを集めて狭い空間を作り、入り込む「避難所ごっこ」。

震災の影響を受けたと思われる様々な遊びを保育者はじっくりと見守り、最後は見届ける毎日であった。

しかし、あの震災で家屋の下敷きになり、やっとのことで救出されたという恐い体験をした四歳児のS君は昼寝中に恐い夢を見ては泣きじゃくる。

又、当時生活の立て直しの為に両親と別れ、長期間遠い田舎に預けられた四歳児Yちゃんは、毎朝登所時、母親と別れ際に大泣きする。こういった子どもたちの不安な気持ちは働く母親の心理状態と密接な関わりを持つ。震災後の生活の立て直しの為に奔走する母親の疲れも出る頃である。

職員は担任を中心に話しあい、連絡を密にし子どもたちの保育所での生き生きとした姿を毎日のように母



▲大好き！ くるくる滑り台

台車で前もって運びながら、補修工事終了の様子を見に行く保母に、「保育所、きれいになっとった？」「きりん組のおへや、大丈夫？」と必死で聞き出そうとする年長児。その声に応える如く職員は平常保育の中、子どもの昼寝時に交代で出かけ、各保育室の受入れ準備にあたり、サビだらけの固定遊具は職員のにわかベンキ屋で

親に伝え、ゆっくりと母親の心の底にある思いを聞き出し、共に考え、励ますように努力した。

母親の心の立ち直りと、安定が戻ってきた晩秋の頃、S君とYちゃんにも心からの笑顔が戻ってきた。

十二月に入り、引越後八か月となった頃、明るい子どもたちとは逆に、通勤に不便な保護者からは

「御影の補修工事はまだ終わらないんですか？」の苦渋の声があちこちから聞こえ始めた。

「ほんものの保育所や！」

十二月のクリスマス会の日程を早め、とうとう中旬の土曜日と御用納めの最終日の二日間に分け、元の御影保育所への引越が実施されることになった。

見事に生まれ変わった。数回に及ぶ完了検査と清掃修理の末、何とか受入れ準備は整った。

平常保育を実施しながらの二日間の引越は、保育課、福祉事務所、ボランティアの方々、保護者など多大なバックアップを得て、職員一丸となつての、まさに大移動であつた。

新年明けて、一九九六年一月四日から元の御影保育所での保育再開。

子どもたちも保護者も職員も、どんなにか待ち望んだ瞬間であつただろう。

「先生！ほんものの御影保育所やなあ！」大はしゃぎでスクーターを乗り回し大好きならせん滑り台に挑戦する。

御影保育所の名物でもある避難用のこの滑り台は子どもたちいわく「くるくる滑り台」で、○歳児以外の子どもたちが滑ることのできる、まさに夢の滑り台である。

おわりに

新年再開後二週間……あの忌まわしい一月十七日からちょうど一年。

保育所で唯だ一人亡くなった当時○歳児クラスのK君の追悼の集いで、又新たな涙を流しながらも、我々職員は心に誓う。

これからも逞しく明るい御影の子どもたちに負けないように、前を向いて生きることの素晴らしさ、大切さを子どもたちに伝えていくことを。

引越に始まり引越に終つたこの一年。

自らの心のケアはもちろん、子どもたち、保護者をしつかりとサポートする中で、この紙面には書き尽くせない程の数々の貴重な体験こそが、人間として、保育者としてのこれからの原動力となろうことを願わずにはいられない。

(神戸市立御影保育所)

小学生になると悩みは 友だちや先生のこと

小島 直美

友だちのこと聞いてもらうと安心

子どもが小学校に入学すると、一日のかなりの部分を学校で過ごすようになります。この時期の電話相談の内容も家庭でのことより学校でのことが目立ってきます。お友だちとのこと、先生のこと、深刻になってくるといじめのこと。今回はそんな小学校時代のこと
に焦点をあててお話ししてみたいと思っています。

母親からの相談に混じって子ども本人からの通話が小学校高学年から増えてきます。まだ心の奥を言語化する力は未熟ですが、今起きていることをストレートに訴え、それを聞いてくれる「おとな」に安心し、簡単な助言が得られるとあっさりとは相談が終わることが

ほとんどです。

四年生女児から

クラスに悪い子が二人(A・B)いて、私の仲良しのCちゃんをとっちゃった。Cちゃんはまだ私と仲良くしたいのに二人にだめって言われる。私の方を見てAとBがコソコソ話してる。クラスに転校生で嫌われもののDちゃんがいて、かわいそうだから私が遊んであげたのが原因らしい。Dちゃんと遊ばなければBちゃんに恨まれずにCちゃんとも仲良くできると思うけどDちゃんがかわいそう。でもBちゃんもAちゃんにそそのかされていて本当は悪い子ではないのかもしれない。

自分もつらい立場にありながら友だちのことを一生懸命考えて何とかしようとするこの子の意欲をほめ、一緒にあれこれ考えていると、先生に相談してみようか、クラスの他の子にも聞いてみる、と広がりを持つ

た解決案もできませんでした。私、やってみます、と力強い声が印象的でした。

今問題になっている“いじめ”に相通じる部分を持ちながらも、こうした小さい事を乗り越えて人とのつきあい方を上手に学んでいけたら、と応援しています。

子どもたちが先生を変えた

かわいい訴えは友だちのことが多いのですが、たまに先生への不満が語られます。背の順の並び方が実測と違うけど先生に言っても変えてくれない、先生がひとりの子だけひいきする、等の少し広い視野で学校生活のことを話しあうことで解決しそうなことから、先生がこわい、体罰がある、お母さんに言うのと仕返しされる、と深刻なものもあります。

母親からの相談の中には教育委員会に訴えたい一歩



手前のものも目立ちます。感情的になつての主観的訴えになりがちなことを差し引いても子どもたちの学校生活の悲惨さが伝わってきます。

「ストレス解消器にしてやる、と自ら言つてのなぐる蹴るが日常茶飯事。胸が赤くなったり、顔についた掌の跡を冷やして帰ってきたことがある」「先生に借りたのりを出しすぎて余らせてしまったら顔に塗られて帰ってきた」「ごはん給食でおはしを忘れたら手で食べさせられた」「授業中は当然ながら給食の時間もおしゃべり禁止で、罰に黒いもの着てきなさいと言われ、黒いトレーナーを一週間洗えないでいる」「修行席なる一列前にとび出た席に悪いことすると座らされ、常にまた前に出すよとおどされている」「太っているから鉄棒ができないのよ、あんたがバカだから夏休みなしよ、と子どもを傷つけることを平気で言う」等々。

子どもを人質にとられていると思う現状、我が子にさえふりかからなければ事を大きくしたくないと言う

母親、訴えても否定する教師、当の先生が否定しているからと取りあげてくれない校長……。それでも何かできることがないかと共に考えていった相談の中で次のような例がありました。

五年生男児の母親から（九月末に）

担任の先生と子どもの間がうまくいかない時、親はどういう態度でのぞめばいいか。この先生は前年度他学年の担任で、親からやめさせてほしいと校長に抗議があった。一学期はなんとかやってきたが、二学期になっていろいろ事件が起きています。すぐ「かばんしょっておかえり！」と口ぐせのように言う先生に反発し、ある日その言葉に十五・六人の子が「ヤッター！ 帰ろうぜ」と教室を出てきてしまった。我が子が主犯格。その後先生から子どもへの気持を無視したり否定したりする仕打ちが続く。

息子には自分の意見ははっきり言えるようにと育ててきた。そんな息子を親としては支えてあげた

いが……。

——そして一年半後（六年生の二月末）

前回の相談の後、まず息子の気持を理解して受けとめるようにしたら、学校でのストレスを家でぶつけ、母親に対して赤ちゃん返りの甘えも見られた。「どんなことがあってもお母さんはあんたを守るよ」「言いたいことがあったらきちんと先生に話してごらん」と言い続けた。一方で、何かと父母から批判の集中する先生で親たちも集まれば先生の悪口だったが、子どもたちにとってどうすることがいいことだろうか、との話しあいも持てるようになった。結果、それぞれの親が子どもの訴えはよく聴きながら、先生にはいつも子どもたちが反抗的で悪さしてすみませんとひたすら謝り続けた。学校では先生と子どもたちが本音をぶつけあって言いたい放題しているうちに先生が少しずつ変わってきた。親に対して子どもたちをかばうことまででてきた。六年に持ちあがった時、長い教員生活で持ちあがりは初めてと先生が喜び、暗かった先生がどん

どん明るくなった。六年生三クラスのうち、子どもが先生に物を言えない他のクラスでは登校拒否もでていたが、我が子のクラスはすごくまとまって卒業を迎えられた。卒業間際のお楽しみ会では先生をネタに劇があり、先生も役をもらって一緒に演じた。親が前面に出ず子どもたちの動きを応援したことがよかったと報告があった。

子どもにはおとなにならない純粋な力がある事を改めて感じさせられました。そんな子どもを信じて支えたおとな達の知恵もすばらしいと思います。北風と太陽の話のように、焦らずに暖かい心を注ぎ続けると人の心も柔らかくほぐれていくのでしょうかね。

眠ると朝が来るから寝たくない

一方学校では本来子どもの持つ力が発揮されずに、今“いじめ”が大きな問題になっています。

一年生の男児の母親から

入学したばかり。苗字が珍しくからかわれる。たまにたま母親が公園で、「こいつ○○って言うんだぜ」と蹴られたりサッカーボールをあてられたりしているのを見てショックを受け不安を押さえられない。法務局に姓の変更の問いあわせをしました。本児はおとなしく内気な子。幼稚園でも一時登園拒否をした。母親には訴えてないが近所に住む祖母に「○○はくさいから遊ばないって言われるから学校に行きたくないんだ」と言っている。

母親の不安、動揺をゆっくり聴き、本児の生育歴等



を聞くうちに、半年前に妹が誕生、アトピーがひどく育児が大変な母親の状況が語られ、本児も兄弟葛藤がでてやや不安定な状態であることもわかる。

まだ一年生であることから、担任と連絡を取りあい、家庭でも本児が認められ自信が持てるような心がけて様子を見ようと相談を終える。

二か月後に電話があり、落ちついたり又くり返されたり続いている。母親も時ついカーッとなって「どうしてそんなボーッとしているの！くやしかったらやり返してきなさい！」と怒ってしまった。一方、担任の先生の学級全体の指導には期待ができてさうだ

し、いろいろな経験をしながら本児の力が育っていくのを支えて見守っていきたい、とも語られる。子育ての中の第二子への負担は大きく、その母親を支える役割が電話相談でできればとの対応に心がけた。

その他にも、なぐられたり蹴られたり言葉の暴力を受けたたりシカトされたりして、登校を渋る、眠ると朝がくるから寝たくないと言う、死にたいとベランダで考えこんでいる、等のいじめの相談が寄せられています。

母親からの相談の場合、まず子どもに原因があるからいじめられると考えることを伝えます。母親が我が子や自分の子育てや自分自身を肯定していけることを援助したいと思います。かけがえのない我が子を受け入れてあげられることが出発点になるのですから。その上で学校での先生の指導を期待し、上手に連携がとれるよう助言します。万一それが期待できない時は子どもを守るために別の方法を一緒に考えていきたい

と伝えます。

いじめ相談のPR後の反応

一昨年末からいじめによる自殺が続いたあと、県や当所独自でもいじめ相談のカードやちらしを配布しました。「悩んでいないで相談しようよ」と呼びかけてみたのですが、当所ではちらし配布直後はいじめ以外の相談やいたずら電話は増えましたが、子ども本人からの深刻ないじめ相談はありません。

そんな中で一応いじめを訴え、内容的にもおきまりのいじめの状況を語ってはいるものの、うしろで笑い声が出たり、母と替わりますと別の子が母親らしき口調で子どもがいじめられていると訴えてきたりの「電話相談ごっこ」的通話がいくつもありました。世相を遊びに取り入れるたくましさと考えてみたり、それも何か「いじめ」に反応するモヤモヤを間接的に訴えているのかも知れないと思ったりしながら、ひとつひとつの電話に誠実に向きあっています。そんな対応が

いつか本当に悩んだり困ったりしたときに、この電話相談を思い出してくれることにつながっていくと信じています。

心の拠りどころになれる電話相談をめざして

今、二人の小学生の継続相談者がいます。Tちゃんは小学校四年生の時からもう三年近くになります。

「先生、吐いたことある?」「幽霊って信じる?霊界への入り方教えてあげようか」「髪って短い方が似合うよね。切っても切ってもものびてくるんだ」「先生子どもの頃どんなプレゼントもらった?」。相談員の家のインコが死んで泣いた話をする。「へえ、おとなが泣くの?うちの人も泣かなかったよ」。修学旅行の話など現実的な話もたまにあります。いつもこちらが深読みすると気になるような話題をさりげなくあっけらかんと話してあっさり切ってしまう。

もうひとりKちゃんは小学五年生。はじめは、以前家具の後に隠した悪い点のテストを父親が部屋の模様

替えて見つけたらどうしよう、との相談でした。その後も風邪で学校を休んだ時、冬休みちょっと退屈な時、猫を飼いはじめた時、少しの間おしゃべりをしました。最近の電話では、「仲良しの友だちが急に口をきいてくれない、帰りいつも一緒なのにさっさとひとりで帰っちゃった」と気になる訴えが聞かれました。

もともと友だち関係に不安定なものがあったり、家族の中でも淋しさを抱えていたりして、時々電話相談で何かを求めているのかもしれませんが。すぐそばにはいられないけれど何かの時には思い出してもらって話を聴いてあげられる人として、Tちゃん、Kちゃんの心の拠りどころになれたらと願っています。

いじめに限ったことではなく、誰でも誰かに自分をわかってほしい、認めてほしいという気持があるのだと思います。

(元神奈川県横須賀児童相談所電話相談員)

『十里霧中』

——息子たちのイギリス公立校体験記(4)——

豊田 一秀

外国に暮らすと、何事に付けても物事を自国と比べている自分に気が付くことがある。しかし、

考えてみれば「外国」「自国」と言っても、それは正確にはどちらも「限られた自分の体験」の寄せ集めと言うべきもので、限界や片寄りは避けるべくもない。そのことを頭に置きつつも、イギリスの学校、子どもについての個人的な印象を少し

述べてみるところから今回は筆を起こしたい。

二人の息子たちが学校の授業で戸惑ったことは、学ぶということが「覚える」ことではなく「考える」ことであるというイギリスの教育の基本的な姿勢であったようだ。

イギリスの先生は、これから扱おうとする分野

に生徒が興味を持つように細かく心を砕いている。そのため、できるだけ生徒の日常に近いところから問題の糸口を見つけ出させようとしている。子どもが本気で「食いついてくる」ように、その単元を用意する先生の努力や教科書の姿勢は日本にも大いに参考になるように思えた。なお、イギリスの教科書は立派な物であるが通常、個人持ちではなく、生徒に貸し出されるという形を取っている。

授業では、正解を求めるといよりは、あなたはそのれについてどう考えるか、という問いかけが多くなされる。生徒は資料を多く集め、自分の意見を論理的に述べることを求められるのである。子どもたちは言葉の問題にも増して、この形式の設問に面喰らったようであった。この設問に答えるには、暗記に比べ時間がかかり、なおかつ自身自身を問うに關与させなければならぬ。息子が

「ああ、めんどくさいな、こんな問題！」と言う気持ちだが、内心分かるような気持ちがあったと同時に、今まで日本で息子たちがしてきた勉強の質そのものが問われているような思いであった。このような設問をすれば先生もマルかバツかのみで評価する訳にもいかず、コメント付きの評価ということになり、先生の仕事も大変な量になることが想像された。少し乱暴に対比させるなら、日本の教育が学びの量、効率に重きを置いているのに対して、イギリスの教育は学びの質に重きを置いていると言っても良いかもしれない。知識の量は日本の子どもの方が多いが、身につけた知識はイギリスの子どもの方が深い、と言うことなのだろうか。

イギリスのこの教育の姿勢は結果として、個を伸ばす事にもつながると言えよう。問題に食いついて行けば、それ相応の応答が教師から得られ、

例え教師の意見に反対してもそれに一理でもあれば多少不完全であっても認められる。この暗黙の了解は「自分を出すことは良いことだ」というメッセージを生徒たちに送る結果になっていると思うのである。

しかし、反面、この方法は設問に興味を示さなかった生徒や、問いそのものを理解できなかった子どもに対しては最低限の知識さえも保障しない場合があるという事実につながる。教師は、生徒がその学科や単元に興味を持つように努力はするが、最後のところは生徒の決定に委ねているように私には思えた。全員が全教科で同じように良い成績を取る等という事は、イギリスの教師はそもそも考えていないのである。

一事が万事で、この事実はイギリスの運動会 (SPORT DAY) を見ても感じられた。陸上競技を主体としたいくつかの競技が芝生のグラウンド

で行われるのであるが、参加したくない子どもは体操着さえ着ずに、一日芝生に座って観客気取りである。機会均等をうたって、リレーまでクラス全員参加で行ったりする日本の学校と比べると、余りの考え方の違いに当惑する程である。

このような、生徒の特性に合わせる教育の方法は高校 (SIXTH FORM) になるともっと徹底してきて、高校では生徒は三教科を選択して二年間その科目しか勉強しない。ただし教科の内容は大学並みとなる。その科目が凡、大学での専門につながる訳であるから、自分の将来は十六歳の時に大方は決めなければならないということになる。これには、時期が早すぎる、もっと広い基礎的な教養を身に付けさせるべきだという意見も多いようだが、自分の意見というものを持っていれば、もう自分の将来は自分で決められるはずだという判断があるのかもしれない。イギリスでは高

校生から急に大人っぽくなるのもこの辺に原因があるようだ(事実、バブリックスクールへ私立の寄宿制の学校へでは、高校から学校のバーでビールが飲めたりする)。

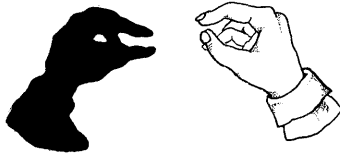
当然の結果として、成績が上位の生徒と下位の生徒との間では、学力のみならず広い意味での知識の差が大きくなってしまふ。そして、その差は一般の日本の生徒における差よりも大きいと思われは思われた。日本でよく批判される、画一的な没個性の一斉授業が生徒の学力の差を少なくしているとも言えそうである。

これはイギリスに於て義務教育後の進学率が日本よりもずっと低いことにも関係があろう。(日本では九十パーセント以上なのに対してイギリスでは三十パーセント台 注一)

イギリスに於て、高等教育は本当に勉強をした人間が受けるものなのである。しかし、イギリ

スの教育のこのような勉強の仕方は、例えば家庭にどの位書籍があるか、親がどの位子どもに質問に答えられるか、どれだけ教育に消費出来るのかというような問題とも関係してくる。この事は階級社会を色濃く残すイギリスに於ては、中流以上の家庭の子女が良い成績を取りやすいというこの国の大きな社会問題につながっているのだが、本文ではこの問題には触れないでおこう。

広い意味での学力の差が、イギリスの方が日本よりも大きいように思えると私は述べたが、私が強調したいことはこの差よりも、一



般のイギリスの子どもたちの態度である。小学生は大方は学校以外で勉強することもなく、のんびりしていて、それでいて知りたがり屋で日本の子どもより幼い感じがする。日本の子どもより「いじられていない」という表現が合っているかもしれない。中学生以上となると、勉強が今一つの子どもたちも生き生きとしていて、自信を持って生きていくように私には感じられるのである。彼等はどちらかと言えば自信過剰気味で、自分を強く主張し、余り他人の言うことに耳を傾けない、もう少し周囲から学び取ろうとする態度があれば良いのと思うことすらある。しかし、大人と対等に話す態度は堂々としている。日本の小学生が仲間同士で大人びた会話をしたり、早くも冷めた目で社会を見たりする一方で、大学生が往々にして大人と話が出来なかったり、社会的な態度が育っていないかったりするのに比べると興味深い。

日本人に英語を教えたことのある複数のイギリス人が、日本人は勉強意欲が強く真面目であるが、常に周囲の目を気にし、自信なげで、未成熟 (IMMATURE) だと感想を述べているのと比べ合わせても両者の差が大きいような気がしてならない。もっとも、私は未成熟には成熟の可能性が秘められていると思うのであるが、まあ、いざれにしてもこれは言わば文化の型の差とも言えるものであって、簡単にどちらが優れていると言えるような問題ではなく、興味は尽きない。

最後に、先生に勧められて次男がクラスで話したトピックについて書いてみたい。日本の学校について何か話して欲しいといわれた次男は、考えた末に日本の学校での掃除について取り上げた。日本では、校舎の掃除は主に生徒がしていること。それが校舎を汚さないようにする気持ちにながっている事などについて話したようだ。イギ



▲次男とサッカー仲間たち

リスの友だちの反応については分からなかったが、次男が「掃除」という点で文化の差を感じていることが面白く思えた。実際、イギリスでは幼稚園から大学まで、掃除は専門の人のやるべき「仕事」であって、自分で掃除をしてしまうことはその人たちの仕事を奪ってしまうことになると考えている節が窺える。これも階級制度の一つの名残なのであろうか。日本で古くから便所掃除に大きな教育的な意義を見出しているのと同様に思えた。もっとも最近の日本の学校は、さてさて？ であろうか。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園教諭)

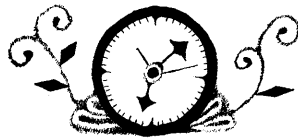
注1 『バブリックススクール』竹内洋著、講談社現代

新書

昭和、昭和、

昭和の子どもよぼくたちは

津守 房江



時の扉は突然開いて、私たちに
過ぎ去った日の断片を、影絵のように
見せてくれる

寒さの厳しかった二月のある夕方、夫と私は麻布
のビルの谷間にある、ダンボールの卸問屋から出て
きた。折り畳んだ大きな新しいダンボールを十個、
紐でくくって持っている夫の背中に、強いビル風が

吹きつけ、ダンボール箱をあおっていた。

わが家には、夫の父が若いころアメリカで買った十九世紀の聖書の注解書など、古い英文の書物があった。長く保管していたが、もっと有効に使える場所に移管するため、この日は新しいダンボール箱を買いに来たのだった。

後ろから見た夫は、風邪が抜け切らず、年老いて見えた。そのとき、私は思いがけず子どもものころ歌ったあの歌を、口ずさんでいた。



昭和、昭和、

昭和の子どもよ

ほくたちは、

心もきりり、

姿もきりり、

歌いながら唐突に夫の前に立って、ダンボールを半分持つと、タクシーを捨うため、風の中で手を上げた。結局私の方がもっとよろけて、やっと助けられて家に戻った。

その後もこの行進曲風の歌が、時々口をついて出てくることに気がついた。あれは昭和になったとき、大人たちが子どもに歌わせようとして作った歌だったのだろう。昭和一桁生まれの私の親は明治の生まれである。明治生まれの人が大正の十五年間を通して、昭和という新しい時代に子どもたちに望んだのは「心もきりり、姿もきりり」ということだったのだろう。そのころ家にあった歌の本には、この歌の歌詞にセーラー服の女の子と、学童服の男の子が並んでいる挿絵がついていた。河目悌二の絵だったと思う。

それにしても、ここ一番しっかりして思う時に、子どもころの歌が飛び出してくる。昭和の初めに新しい時代精神として、「きりり」と願ったこと

は、こんな形で、子どもの中に残っていたのだろうか。

*

時代の精神が「きりり」を望んだとしても、家庭の中では子どもたちは、いつも「きりり」としているわけではない。子どもたちはよく風邪をひいたが、一度風邪になると温かい葛湯を飲んで、長いこと寝ていた。吸入器という喉の治療道具はいやだったが、床の中で過ごすのは、決していやではなかった。

なぜ、親たちがそんなに子どもを大事にし、病気を恐れたかという、そのころはどここの家にも幼いうちに死んだ子どもがいたからだと思う。私の家では、一番目が死産で、二番目が一歳四か月の時に死んだという。母は死んだ男の子を「けん坊」といい、私たちには「お兄様」と話した。仏壇には茶色くなった赤ん坊の写真があったが、「お兄様」と呼



ぶには違和感があった。何十年たっても母は毎朝炊き立てのご飯と水を供えた。供えたものを置きっ放しにするのを母はとても嫌った。母にとっては死んだ子どもが近くにいるようであり、死の世界とつながっていたのだろう。宗教というより、素朴に幼いものの死をいたみ続けた。その思いは後から生まれた私たち姉妹に向けられ、細やかな世話を惜しみ無く注いだことと思う。

私は現在の台東区立根岸幼稚園の一年保育に行っていたが、風邪をひくと父母はすぐ休ませたので、私の欠席が特に多かったからか、私がまだ茫漠とした世界に住んでいたからか、友達についての思い出はほ

とんど無い。ただ先生の袂の揺れ動く様子とか、走り回る男の子たちのたてる響きなどを記憶しているだけである。

*

私の読書は手当たり次第に活字を拾って読むことから始まった。

多分雑誌の発売日だったのだろう、『幼稚園』『小学〇年生』がとどけられる日、自分の本だけでなく姉たちのも、母の婦人雑誌の『主婦の友』も全部目を通うした。

姉が『少女倶楽部』を読むころになると、姉が一



応読み終わるのをじっと待っていて、もう一度読み返す時、声を出して読んでもらった。薄暗い階段の下から三段目当たりに腰を下ろして、姉のわきから首をのばして聞き入った光景は、今も忘れることはできない。

やがて吉屋信子の少女小説や、佐藤紅緑の本が置かれるようになったが、私を捉えたのは、佐々木邦著のユーモア小説である。特に『苦心の学友』という本が好きで、耽溺するように繰り返し読みふけた。筋といえば、華族（貴族）の若様があまり勉強の出来が悪いので、ご学友が住み込む。主人公のご学友の少年のカルチャーショック、いたずらで遊び好きの若様とのやりとり、芽生えてきた少年たちの友情がある。監督をする老人は少年たちが怠けると、『散乱心を戒めて……』と注意を促した。その言葉も記憶に鮮やかである。

四十年くらい後になるだろうか。『苦心の学友』が復刻されて、夫が図書館から借りてきてくれた。

私はちらっと見ただけで、手に取る気さえ起こらなかった。『これがお母さんの愛読書か……』と苦笑されたからではない。自分では否定する気持ちもまったくないから、強いていえば、照れ臭いような、人見知りにも似たものなのである。

ユーモアはその時大声で笑わなくても、いつまでも心に残るものである。出来事を対象化してみるからユーモアがでてくる。今でも落ち込んだ時、一方では再起不能みたいになりながら、『どうってことはない』と思っている自分がある。まだあの本を手にする気になれない自分は、頑固で恥ずかしがり屋なのだと、ユーモラスに自分を見ている。

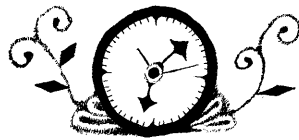
*

もう一つ、子どものころの私の変わった愛読書について、触れてみよう。少しためらったのは、この本が正式の本ではなく、『主婦の友』の付録の『子どもを叱らずに育てる法』という小冊子であったか

らである。

前半が教育論で、後半は『子どもに読んでやるお話し』『絵のかきかた』などがあつた。これも河目悌二の挿絵で楽しかったが、特に私を捉えたのは前半の教育論だった。私は『叱らずに……』ということにひきつけられたと思うが、私自身はそんなに叱られることもなく、姉たちが叱られるのをいやだと思っていた。だから母が理不尽な叱り方をすると、この本をもってきて「そんな叱り方はいけないってこの本に書いてある」と母に言った。母が笑いをかみ殺していたのは、私がいかに効かっていたからだろう。

この本の作者は、霜田静志先生だったが、当時の



私には名前の読み方さえ分からなかった。しかし頭の奥に字の記憶が残っていたのだろう。二十年近くたって児童学を専攻した時、『ニイルの学校』の紹介をした大著にこの名前を発見した。二十世紀の初めの自由教育の実践者として、ニイルを日本に紹介したのがこの人だと知った。

それからまた二十年、井荻児童研究所の研究会から招かれて、夫と二人で私たちの絵の研究について

話に行った。この研究所が霜田先生の自宅の続きにあって、個人で建てられたものであることを知った。高齢の先生がその一生を一人の草分けの学者として、在野で歩まれたことに感銘を受けた。勿論十歳になるかどうかの私に大きな影響を与えてくださったことも、お話しした。



初めに紹介した「昭和、昭和……」の歌は次のように続いている。

山、山、山なら富士の山、
行こうよ、行こう、足並みそろえ、

タララッタ、タララ……

このように歌いはやされても、決して足並みをそろえない有名無名の人がいた。霜田先生もそうだろうし、ささやかではあるが私の父もそうだったように思う。子どもの目からも何か大切なことを守っていることを感じていたが、大人となっってはつきりとした流れの中でとらえ直すと、一層この時代に子どもとして出会ったことの一つ一つが、意味のあることと感じられてくる。

(歌詞は記憶のみにたよりました)

声がでない日に思ったこと

伊集院理子

私は、風邪をひきかけるとすぐにのどにくる困った持病がある。保育者という声をよく使う仕事についていながら、季節の変り目に年に二、三回声がでなくなってしまうのである。朝起きてのどが少々いがらっぽいと感じた日、保育中はどうか声がでるのだが、子どもたちが帰った後、少

しの間黙っていて、さて同僚に話しかけようと思うと、もう声がでない。いざ声がでなくなったら慌てて、うがい、のどあめ、のどスプレー、さらには吸入器と、あの手この手で回復をはかるが、一旦声がでなくなると、少なくとも二、三日はかかってしまう。しわがれ声でも出ればまだい

いのだが、ほとんど相手に聞きとれないような声で保育をしなければいけない羽目に落ちいつてしまふ。そうなる前に予防ができればいいのに、それができない性格で、いつも声がでなくなつてからあたふたしてしまふのである。

そんな状態の時に、人に出会つと、口々に「仕事どうしているの?」「仕事にならないでしょう」と言われる。教師言葉で教え諭す職業というイメージがどうしても強いのだろう。私自身、保育者になりたての頃は、そのイメージからくる気負いがあり、大きな声を出して、子どもたちを動かそうとしていた。でも、今は少し成長し、声でなくても「仕事になる」ようになってきた。

朝、「おはようございます」としわがれ声でありさつすると、「また、声、でないの」という反応が子どもたちからかえってくる。声でないとわかると、いつも以上に私の言うことに耳を傾け

ようとしてくれたり、中には、私にあわせてひそひそ声で話かけてくれる子どももいる。私の声でなくとも、子どもたちにとっては、いつも何ら変らぬ一日で、やりたいことを自分で見つけ、それぞれに遊びだす。私に用がある時は、近くに寄ってきて、「○○つくるから○○ちょうだい」と話しかけてくる。それを聞いて、子どもの要求

するものを渡してあげればいい。子ども同士のトランプがあつた場合は、こちらから子どもたちのいる所へ参上し、それぞれの言い分をよく聞いて、相手にそれぞれの言い分を伝えたりしながら折りあいが見つかる方向性を一緒に



考えていく。ひそひそ声でも、私の伝えたいことは、一応聞いてくれる。最終的にどう折りあいをつけていくかは、子どもたちに委ねるようにする。声がでなくとも身体は元気なので、子どもたちと一緒にサッカーをして走りまわる。一つのボールを追っかけて走りまわるのに声は必要ない。お庭のおままごとのレストランにごちそうになりに行く。子どもたちが、それぞれにつくったご自慢のごちそうを差し出してくれるので、おいしそうにごちそうになる。その日にしたことを思い起こしてみると、子どもたちがそれぞれにやりたいことを見つけ、自分たちで遊びをつくっていくごく普通の保育場面では、保育者が大きな声を出す必要はほとんどないのである。

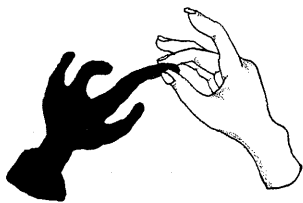
とは言っても、普通に声がでる時には、声、言葉にどうしても頼ってしまうのだ。声がでないもどかしさを感じたのは、次のような場面である。

遠くから遊びの様子を見ていて、困ったことをしでかしている所を発見してしまい、「A君、それは、やめて！」と咄嗟にその場から大きな声を出したくなって、声がでなくてハッと気がついた。子どもの行動を制止したり、制限したりする時に、どうしても声を頼りにしてしまう。瞬時を争う時には大声をはりあげざるを得ない時もあるが、大体は、そんなに切羽詰まっていない場合がほとんどである。それでも、「やめさせたい」と思った瞬間に声がでてしまう。気になることを見かけたなら、まずは、子どものそばに歩み寄って、子どものやっている様子を身近によく見て、それでも「やめさせた方がよい」と思う場合は、子どもの手をそっと押えたり、抱きとめたりして、わたし自身の身体を動かして身体と身体の触れあい、子どもの行動を制止することができはるはずである。もどかしさを感じつつ、声がでない分その

日はいつともより意識的に身体を動かしてみても、そう実感した。

子どもたちがそれぞれにやりたいことを見つめ、自分の思うようにそれを展開していくことを一番大事に考えている私どもの園でも、子どもたちが集う場として、片づけ、お弁当の支度、お帰りの支度など、集団として一つの方向性を示していかなければいけない時がある。そういう時、全体に周知徹底させるには、大きな声を出すのが手取り早い。でも、私どもの園では、そういう時も、担任が大きな声を出して子どもを動かすことはできるだけしないようにしている。声がでないその日、「そろそろお片づけにしましょう」と一言私が言うと、もうそれ以上何も言わなくても「はやしのくみ、お片づけ」と口々にリズムをつけながら言いあって、あっという間にお片づけの態勢になっていった。そこそこには片づいてきて

いるのだけど、最後の詰めがなかなか進まない時に、又、大きな声をだしたくなった。正直言って、よく陥るパターンである。はじめは、「そろそろお片づけにしましょう」と個別に声をかけていくが、それだけではなかなかやってくれない時もあり、あまりの遅々たる進み具合に、だんだんあせりを感じてきて、心中穏やかではいられなくなって、「さあ、もうやめて、片づけましょう」と、声のトーンがどうしても大きくかつ強くなってしまふのである。でも、声がないその日は、腹を決めて自分の身体を動かして、子どもたちに小聲で具体的に働きかけて



いったら、わずかの間に、詰め所まで片づいていた。

お帰りの時間まで、あと少し時間が残っていた。時間に余裕がある時は、本を読んだり、ゲームをしたり、少しでもみんなで楽しい時が持てるように常日頃心がけているが、何しろ声がないのではどうしようもないと思っていたが、ふと小さい組の時から何度も読んできた『もこもこもこ』（谷川俊太郎作 文研出版）の本ならば、本のページを私が見るだけで、子どもたちが声をだしてくれるにちがいないと思いあつた。『もこもこもこ』は絵それ自体が音を表現している本で、「もこもこ」「ぼろり」「つん」「ふんわ、ふんわ」とか、その絵にびつたりの音がつけられている。私は、ページをめくるたびに、声はださずに、出来るかぎり表情や身ぶりで音を表現するよりにしたら、子どもたちが次々と声をだしてくれ

て、期せずして私が出して読むのとは又ちがう貴重な絵本体験ができた。

声がない数日の間、大きな声をはりあげなくても「仕事になる」ようになった自分自身の成長、担任を思いやってくれる子どもたちのやさしさ、口うるさくこちらで言わなくても、毎日の生活の流れが定着して子どもたちのものになっていること、まだまだ言葉を頼りに保育をしている場面が多いことなど、色々と感じることが多かった。声ができる日常においてもこの日の体験をいかし、自分の身体を動かして、言葉に頼らずに子どもと響きあっていきたい。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

東欧の子どもたちと幼児教育(2)

ユーゴスラビアの保育の現状と子どもたち

入江 礼子

はじめに

私たちがユーゴスラビアというと、まだまだ旧ユーゴスラビア連邦を思い起こしてしまいます。ヨーロッパのアドリア海をはさんで、イタリアと向かい合った位置にあったこのユーゴスラビア、いまでは、五つの共和国に別れ、それぞれが独立しています。ユーゴスラビア連邦共和国（セルビア共和国

とモンテネグロ共和国と二つの自治州からなる）、スロベニア共和国、クロアチア共和国、ボスニアヘルツェゴビナ共和国、マケドニア共和国の五か国です。一九九二年から一九九五年秋まで続いたボスニアヘルツェゴビナの内戦の悲劇は、現在でもまだ戦後処理が終わったとはいええず、難民問題を中心とした人権問題をはじめ、政治的、社会的経済的な問題が山積されています。

今回ご紹介するのは、このなかのセルビアとモンテネグロからなるユーゴスラビア連邦共和国の保育の現状です。

ユーゴスラビア社会の現状

ユーゴスラビア連邦共和国はボスニアの内戦が停戦になるまで、ボスニア内のセルビア人勢力を援護して来たとして、昨秋まで国連から経済制裁を受けていました。穀物地帯をかかえているので、食糧には不自由しなかつたようですが、ロシアからの輸入に頼っていた燃料の不足とインフレに悩まされてきました。現在経済制裁が解けたとはいえ、まだ立ち直ったというには程遠い状態です。

また、この国は、前回ご紹介したブルガリアと同じく、人種のるつぼでもあります。民族構成をみると、一九八一年の国勢調査によるとセルビア人六六・四パーセント、アルバニア人十四パーセン

ト、ハンガリー人四・二パーセント、ムスリム人二・三パーセント、モンテネグロ人一・六パーセント、ユーゴスラビア人（多くは、これらの民族の混血の人々で、自分たちをそのようによんでいる）四・七パーセントとなっていますが、現在ではアルバニア人の比率がかなりあがっているといわれています。ユーゴスラビアには二つの共和国のほかに、ハンガリー人の多いボイボディナ自治州と七割以上がアルバニア人で構成されているコンボ自治州があります。北に位置するボイボディナ自治州は生活レベルが高いのですが、コンボ自治州は貧しいこと、特にアルバニア人の生活レベルがセルビア人に比べて低いことが、第二のボスニアになるかもしれないという不安を払拭できない原因になっています。

ユーゴスラビアの保育の現状

ここでは、昨夏のO M E P世界大会のときに、講

演されたベオグラード大学のミアナ・ペジッチ教授の論文からご紹介していくことにしましょう。

現在のユーゴスラビア連邦共和国では、それぞれの共和国が教育のことに責任を持っています。セルビア共和国を例にとると、幼児教育の立法面では労働社会復員軍人保護省が行っており、文部省は教育計画の立案だけしかすることができません。この二重管轄は、教師や教育者の著しい不満の原因となっています。

ところで、ユーゴスラビアの幼児教育は、フレールの影響を受けた幼稚園がハンガリーに近いボイボディナ自治州で、いまから百五十年前に始められました。現在でも、この州は高い教育水準を保っており、小学校入学前に幼児教育のプログラムを受ける子どもたちのパーセンテージは九十一パーセントにのぼっています。このような幼児教育の先進地域がある反面、先程述べたコソボ自治州ではその率は

四・五パーセントとなっており、一国のなかでも、かなりの差があることがわかります。幼稚園の普及率も国全体としてはあまり高くなく、その種類もそれほど豊富ではありません。

幼児教育のプログラムは大きく二つに分けることができます。日本の幼稚園にあたる三〜七歳の子どものための施設と一〜三歳の子どものための保育所にあたる施設です。ただし時間は各々の子どもの家庭の状況によって決められ、短いもので一日三〜四時間、長いもので十二〜三時間となっており、多くの子どもたちは、八〜十時間のプログラムに参加しています。このような保育施設ばかりだけでなく、小学校の入学前に、それまで幼児教育施設に通ったことのない子どもたちのための準備プログラムがあります。幼児教育施設は国が所有しています。しかし、一九九一年以来の東欧の改革の風の影響を受けて、最近では私立の施設も法的に認められ

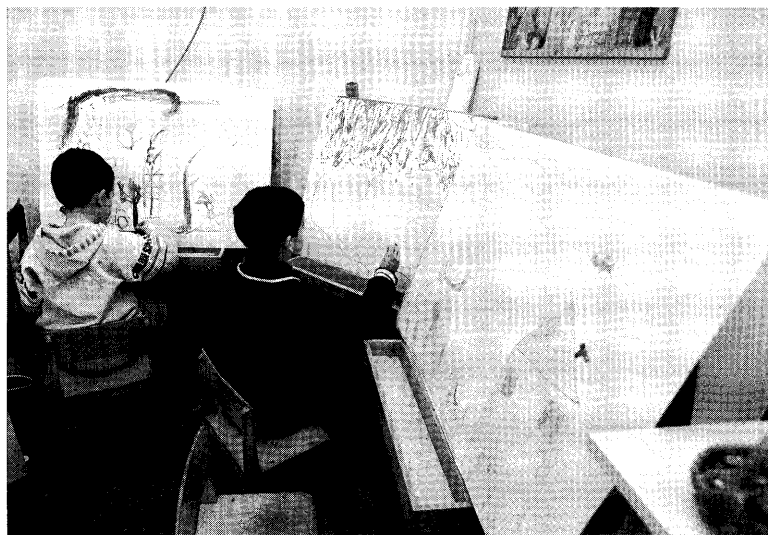
るようになり、徐々にその数を増やしています。

幼児教育の教育費に関してですが、この国の他の時期の教育費同様無料となっています。

幼児教育の内容

それでは、この国の幼児たちは幼稚園や保育所でどんな生活を送っているのでしょうか。先程も述べたように、地域の格差がかなりあるので一概には言えないのが現状なのですが、ここでは、ごく一般的な形を紹介しましょう。

子どもたちは通常年齢別のグループで分けられ、一つのグループの人数も、二十、二十四、二十八人というように多くなっています。ひとつのグループには先生が二人つきます。先生たちは六時間勤務なので、二人の先生は二〜三時間勤務時間が重なって、ここで連絡をとりあいます。朝登園すると、二十分から一時間の先生主導の活動時間があ



ベジッチ教授が10年間研究を続けているベオグラードのヴィラ幼稚園のアートプログラムの風景（ユーゴスラビアの中でもっとも恵まれた幼稚園の一つ）

す。このときの形態は教師やそれぞれの園によって違います。一九八〇年に行われたセルビア共和国の幼稚園に関する研究では、教師の方が、子どもたちよりも活動や遊具の選択をすることが多くなっています。つまり、教師主導の活動が多いということになります。子どもたちの自由遊びの時間は二〜三時間、また昼寝、食事などの決まった活動には三〜四時間を費やしていました。しかし最近では、このようなプログラムも見直され、新しい、幼児教育指針が考えられている最中です。また、ペジッチ教授を中心とするグループがここ十年来、先生たちが指示する活動を中心とするのではなく、子どもたちの相互作用を重視した保育を展開しています。しかし、まだまだ国中に行き渡っているとはいえません。

子どもたちの生活

ユーゴスラビアで何らかの幼児教育を受けている

一〜七歳の子どもたちは約二十パーセントにすぎません。つまり多くの子どもたちは小学校に就学するまでは家庭で育っているのです。

一九八二年の民族学的な調査によると、子育ての方法や住んでいる地域によって、三つのタイプの家族があることがわかっています。まず第一に、伝統的な家父長的な三世代家族。ここでは父親や祖父が家の中心であり、女性や子どもはその下の地位になります。男たちによって生活は守られています。家族の関係はスムーズで、子どもたちは保護され、多くの社会的な接触や手本があります。主に農村部に多く、幼稚園のような保育施設は多くはありません。自然に恵まれています。文化的なもの、たとえば本やおもちゃ、テレビなどが十分にある環境とはいえません。

一方この極にある家族形態が都市郊外に多い核家族です。子どもが家族の中心であり、両親がとても



▲ヴィラ幼稚園でのドラマ表現プログラムの中の一コマ

教育熱心である場合が多いのです。子どもたちは本やおもちや、またビデオ、コンピュータゲームなどを持っています。夫婦が共稼ぎである場合は、同居していたり、近所に住んでいる祖母たちが子どもたちの面倒をみていますし、幼稚園に行っている子どもたちも多いといえます。

今まで述べた二つの形態の間にあるのが伝統的な家族形態から現代的な家族形態に変化しつつある家族です、このタイプが一番多く、変化の途上にある分だけ家族の間の緊張も高いのです。両親の子どもに対する態度も矛盾にみち（時には過保護に過ぎ、時には無視するといったような）、伝統的な価値に変わりうる新しい価値をまだ見つけてはいないのです。子育てという観点から見ると、あまり好ましいとはいえません。

一九七〇年からのように徐々に変化してきていたユーゴスラビアの社会が徹底的に変わらざるを得

なかったのは、一九九一年以降のことです。近隣諸国（元はといえば、同じ国だった）で内戦が始まり、それに続く経済制裁で、幼児教育の状況も他の社会状況同様多くの痛手を受けました。

大人たちの経済が逼迫すると、乳児死亡率があがったり、栄養不良や麻疹などの伝染病の発生率が極端に上昇するなどの子どもたちの健康を害する要素が増えてきました。親たちは未来に対する見通しがないため、子どもたちにエネルギーを注ぐことができないうでいます。

また、近隣諸国から流れてくる何万ともいわれる難民の子どもたちの問題も深刻になっています。幼児教育に関係する人々が中心となって、この問題にも取り組んでいます。日本では、あまり身近には感じられることの少ない「子どもの権利を守る」ということが、この国で目下の緊急課題でもあるわけです。

この国の特色である多様な民族、多様な家族形態、それに加えて、近隣諸国の内戦という問題が子どもたちの生活にも大きな影を投げかけているのです。次回のユーゴスラビアの報告のときには、この子どもたちの権利を守るべく奔走されているこの国の幼児教育関係者の報告をご紹介しようと思えます。

（保育研究グループ「はるにれ」）

参考文献

東欧を知る事典 平凡社

ユーゴスラビアの就学前の子どもたち ミリアナ・ベ

ジッチ 一九九五 未刊

海外幼児教育事情―東欧を中心として― OMEP日本

委員会 一九七九

新指導要領と天文学

近藤 雅之

幼児よりはもっと大きい子のことだが、新指導要領で天文学の持分が減ったのが問題になったことがある。指導要領は随分簡単だからどうにでもなると思うけれど、太陽、惑星、恒星とあったのが、太陽、惑星だけになれば恒星は教えないとなるかもしれない。公害がふえるとともに科学志望者が減って大変と騒いでから今や理科全般の退潮が顕著である。しかし天文の研究者はほとんど地学をとらなかつたことを思うと、また地学をとって勤める天文職というものがない以

上、実害はないともいえる。指導要領はもちろん全体を見る立場があるから各分野が我田に水を引く訳にはいかない。詰めこみはいけなから項目を減らして大事なことにしぼれという意見ももっともである。こんな事をいうと怒る人もいるだろうけれども。

一体天文学は何の役に立つのかというのには人に訊かれ、あるいはいつか訊かれやしないかとビクビクしてきた質問である。関連して思い出すことが二つある。シャーロックホームズがワトソンから地動説の話を引き

いて初めて知ったけれどすぐ忘れようとしたこと。ホームズにとって脳のメモリーを使うに値しない知識だった。もうひとつは、ずっと昔、週刊朝日の対談で徳川夢声と橋本凝胤が天動説論争をした話。夢声が学校で習った地動説では論理で相手を説得できず凝胤師の信念と学問の力が立派に見えた。学校で地球が太陽のまわりをまわるなんて教わってもそんな程度である。

年をとってみると、世の中に役に立つことなにかあるのかという気になる。食物を作る農業は大事だ。痛み止めのお医者が良い。しかしひたすら延命術の医学など良いかどうかわからない。世の中無ければ無いで済むもの許りの気がしないでもない。それで天文学は人間精神の昂揚のためというようなポアンカレ張りの高調子が一番正直の所である。かつては大事だった時刻や暦の関係もすっかりルーチン化して天文学の現場ではなくなっている。

子どもに教える第一はコトバである。幼児から小学

校で日本なら日本語を教えるのが一番大事である。ほかの科目はすべてその補助と想ってもよい。算数は大事である。しかしこれも言語教育の一環である。逆に言語教育がおろそかにされると、算数もわからなくなるのである。端的な例で、仮に形式

計算が出来ても応用問題が出来ないのは、文の理解力に問題がある。これは算数以前の問題といえるが、むしろ算数科で国語を教えればよいのである。言語の力がつけば、興味あることへの子どもの発達は早いものだろう。

天文学専攻者は大まかに二種類に分けられる。半分は子どもの時からの天文好きである。あと半分は大きくなってから学問として天文学に興味を感じた人である。研究者になるのに小さい時からの天文知識は必須ではない。物理などみてもこれは領ける話である。数



学は結構小さい時からの数学好きが多いようで、様子が違うかもしれないが。

大部分の人は天文に関係ない人なのだからちょっと話が違いかもしれない。何になるかもわからない将来を見通して、さて子どもと天文学の接点は何かという、以上の話はあまり肯定的な目標を示してはくれないようだ。そこでわたくしは次のように考える。天文に限らないのだが、数でも物理的現象でもさらにはもっと拡げて万般のことといってもよい、生のいろいろな観察は多いほどその人の生活は豊かになる。

太陽は正視しては目に悪い（これも大事な知識）

が、東から出て西へ沈む、月もそう、星もそう、というのは天文学でなくとも役立つ知識である。しかし星を基準にすると太陽は星の間を西から東に動き一年で天を一周する、月は同様にしかし一月で一周するといふのは観察して自得できるが一般の知識ではない。月のみちかけはすぐ見えるが、その形はよく覚えていない訳ではない。ちゃんとした絵に、時に時所をわきまえて

ぬ月を見かけるから、さすが画家の目は鋭いなどいえない事もある。日本の古典には天文現象が多くはないが、星はすばるという程度知っているといたないでは、感興が違うといえよう。プレアデス星団は、近距離の散開星団で明るい星とは異なる微妙な趣がある。西空に明るい金星を見るのは嬉しいものだし、見たことのない人が多い水星も気をつければ見られる。百武彗星は御覧になっただろうか。

それにしても都会の空で星を覚えるのが難しくなったのは残念なことである。星が見える夜でも数が少なくて星座に結べないことが多い。一番星見つけたなんて言葉はとんと聞かなくなった。

“何十年か前に○○星を出た○○星人が△△座の方から太陽系に近づきつつある”という情報に怯えて、うる覚えの星座を見上げるなんて時が来ないように祈るものである。

（天文学研究者）

子どもたちへのまなざし (19)

静かにするのが好き

松井 とし



幼稚園が歴史を閉じる年のこと、最後のクラスとなった子どもたちの修了式も間近となったある日、私は子どもたちの顔を見ながら「幼稚園で楽しかったことはなあに？」と語りかけた。

「運動会」「いもほり」「春のつどい」「クッキー作り」等と、それぞれに印象深かった行事をあげる子どもたちの中で、A子は凜として「静かにするとき」と言った。日ごろ活発で、ハスキーな声かひとときわ大きいA子の発言。みんなが注目する中で、重ねて「どういう時だったの？」とたずねる私に、A子は少しはにかむように首をかしげながら、しばらく考えて「わからない」と答えた。

最近、いろいろな幼稚園を尋ねるたびに、この場面が思い出される。教育要領の改訂を機に、幼児の主体性を尊重するといった保育が展開されるようになってきている。確かに

活気に満ちているが、しかし、考えさせらるる場面に遭遇することも多い。たとえば降園前、喧騒の中で「今日どんなことをして遊んだの?」と聞く教師の声もだんだん大きくなり、慌ただしさが募る。子どもたちは、せんせいが立ったまま弾くキーボードに合わせて声を張り上げて歌い、そして身支度もそこそこにワァーと帰っていく。そんなに広くはない空間に隣合わせのごっこ遊び。ポリウムいっぱいそれぞれテーブルレコーダーからバックグラウンドミュージックが流れ、まさに音の洪水。

あの時A子が「静かにするとき」という表現で言いたかったことは、どういうことだったのだろうか?もしかして、ひとりで絵本を見てイメージの世界に浸っていたり、毛糸の「織物」に集中していた時のことだったろうか?それともみんなで集まり、ストーブの上でお湯がシュンシュンたぎる音や風の音を聴きながら、読んでもらう物語に耳を傾けていた時のことだったろうか?みんなで考えを出し合ってお話作りをしたり、相談ごとをした時に感じた集団の中の充実や、温かさを表したかったのだろうか?

人々が安らぎを求める現代、非常にゆるやかなテンポの「アダージョ」というCDがよく売れているという。静かにさせられるのではなく、静かにする。子どもたちも、ほっとして自分を取り戻すひとときを求めているのではないだろうか。

(元幼稚園教諭)

外国の文献から

『心情と知性の教育』

—日本の就学前と小学校教育に関する考察—

第一章 日本の教育制度

渋川 明日香

今月号から『Educating Hearts and Minds — Reflections on Japanese Preschool and Elementary Education』(一九九五)という本を九回にわたって紹介します。

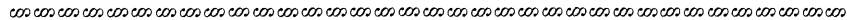
この本は、キャサリン・ルイスというアメリカの研究者が過去十四年間に五十以上の日本の幼稚園・小学校を訪れ、それぞれについて一日〜四か月間行った観察と九十名以上の

教師や園長・校長に行ったインタビューに基づいて書かれたものである。

アメリカでは、日本の子どもは学力が高いことが知られているが、その理由がどこにあるのかはほとんど知られていない。学業期間が長いのか？ 国の作ったカリキュラムの効果なのか？ 家族が教育に関して大きな支援をしているのか？ 様々な憶測がある中で、本書では違う立場での説明を探っている。

彼女は、高校時代に交換留学生として日本の高校で学び、そこで多くの驚くべき体験をした。予想していた激しい競争社会とは裏腹に、友情に厚く、目的を分かち合う生活だったこと。先生が権威的にコントロールするのだろうと思っていたら、生徒が学校生活の多くの側面を運営していたこと。自分だけが物を奪うのではなく、お互いに分け合う感覚や大人がいなくても自分たちだけで真剣に話し合ったり学んだりすることなどの多くの謎が残り、その謎を解こうとしていく中で、彼女は日本の就学前と小学校教育に注目せずにはいられない手ごかりを見いだした。就学前と小学校教育に、日本の教育が成功している鍵とアメリカ合衆国での日本の教育に関する誤解の鍵があると信じるようになったそうである。

そのため本書では日本の幼稚園と小学校低学年の教育に焦点を当て、ルイス女史自身の観察とインタビューに基づいて、できるだけ生き生きとその教室を描こうとしている。インタビューにおいて教師から繰り返し言われたことは、学校が子どもの丸ごとのニーズ（友情・所属感・自分が貢献できること）に合ったとき、子どもたちは学校への情緒的な



絆を強めるということだった。そのときに子どもたちは学校を心から一番興味のある場所と見なすようになり、学習に対して一生懸命になり、他の人に対して心づかいをするようになり、そして学習や自分の行動に対して自己批判的に反省するようになるということだった。アメリカの教師にとっても、友情や所属感を促すことは子どもの成長の中心的な課題である。うまく機能している学校では、他人に対する心づかいや支援的な関係も大切にされている。しかしアメリカのシステムでは、カリキュラムやテストやグループ編成などが、全体としてこれらの目標に合うように作られていない。実際に緊密で心づかいをしあえる関係を学校生活の中心に捉えようと志す教師は、手ごわい障壁に立ちふさがれることが多いのだという。アメリカの就学前そして小学校教育のゴールを一体どこに置くべきなのだろうか。このような問題に関して、日本の教育は貴重な視点を与えてくれる。日本の教育が成功している理由は、幼いときから友情や所属感や学校生活の創造に貢献することなどの子どもたちのニーズに合致しているからである。このような立場に立つて本書は書かれている。

本書の内容は具体的には、一九七九年から一九九三年の間（一九七九年・一九八七年・一九八九年・一九九〇年・一九九三年）の観察とインタビューに基づいて書かれている。



幼稚園の観察は主として一九七九年になされ、その大半が東京および近郊の十五園（私立六園・公立七園・国立二園）である。それ以降は小学校の観察が中心になっている。十五年以上前の観察が中心になっていることもあり、現在と異なる点もあるかもしれない。しかし私たちにとっては当たり前のことが、日本の外から見るととても不思議に映るということが、逆におもしろい視点を提供してくれるため、本誌で紹介することにした。紙面の都合上、全てを訳せないため多少の分かりにくさがあるかもしれない点はご了承いただきたい。

（田代 和美）

日本の就学前教育

日本の子どもの九十パーセント以上は就学前に少なくとも二年間の教育を受ける。日本の教育の中では就学前教育が最も多様で活気があるとも言われている。就学前教育には、働いている親のニーズに合わせた全日制の保育センター（保育

園）と半日制のプリスクール（幼稚園）の二つがある。しかし幼稚園と保育園は大変似ており、カリキュラムと教授方法は基本的に同じである。ただ、保育園の方が長時間で、年齢混合のグループ編成をしているところが多い。「保育園は幼稚園にお昼寝とおやつを足したもの」と、ある日本人の母親は説明した。幼稚園・保育園ともに、私立

と公立があり、選択肢が多い。教育哲学も多様である。モンテッソーリ、デュイイ、フレーベルによるものや、早期音楽教育、裸での外遊びなどを強調する日本的なものもある。

アメリカ人にとって、日本の教師一人あたりの子どもの数の多さは驚きである。日本の幼稚園教師は、アメリカの小規模なクラスでの「母親のような」教師の役割をうらやましく思っている。しかし日本の就学前教育では、子どもの人数が多いため大人の権威の力を弱め、子ども同士の関係を築こうとしている。

日本では政府の規制によって、全ての幼稚園・保育園の基本的な施設が共通で比較的高いレベルになっている。また、多くの地方公共団体が就学前教育に助成金を支給しているのに加えて、国が公立だけでなく私立の施設をも助成しているということは驚くべきことである。

五歳児の教育は日本では就学前であるが、アメ

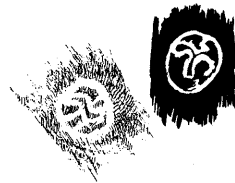
リカでは基本的に小学校教育の一部である。

そのため、勉強面での技能を伸ばさなければならぬというプレッシャーは日本よりもアメリカの方が強いだろう。

日本の初等教育

ウィリアム・カミングズは、日本の教育の中で小学校が最高の施設であると主張する。日本はアメリカに比べて初等教育に多く投資しており、逆に大学教育への投資は少ない。百年以上の間、日本の政治家は初等教育が国の発展にとって非常に重要であると考えてきた。

日本の小学生のうち九十九パーセントは地元の公立小学校に通っている。アメリカの学校と同様



に、日本の小学校は児童の家族の職業、学校の伝統・設備など多くの点で一つ一つ異なっている。

しかし日本の学校の多様性を減らす要因がいくつかある。第一の要因は、文部省が国の教育目標や授業時間を規定し、教科書を検定し、教育政策の多くの面を強く形作っていることである。すべての小学生が、類似した教科書を使い、ほぼ同じ時間数同じ教科を勉強する。第二に、国が助成金を支給し施設や教師の数などの地域差をなくしている。第三に、日本の教師は様々な学校に転任する。つまり教師は様々な背景を持つ生徒を教えるということである。また、小学校の教師は同じ学年を何年も繰り返し教えるということはない。アメリカの教師はある特定の学年を教えて専門技術を磨くことがよくあるが、日本の学校はそれとは逆に教師—子どもとの関係の安定性を重視し、通常同じクラスを二年間受け持つ。このことは様々な学年を経験するというにもなる。日本の典型

的な社内研修に、同僚が直面する問題を理解するためにすべての部署を回るといふのがある。様々な学年を教えることによって、各学年の問題や学習の前後関係を認識することができると日本の研究者は説明している。また、一般に日本では生徒と担任教師が一単位になっていてほとんどすべての教科と昼食の時間を共に過ごす。日本の教師は、クラスという共同体感覚を重視して、昼食の時間や毎日のクラスミーティング・音楽・美術の時間などを共同体の感覚を築く大切な機会であると考えている。

理科と数学の国際的なテストで日本の子どもは常に大変高いランクにある。小学校低学年からアメリカの子どもより一般に優れており、その差は年齢と共に開く。しかし基本的な認知能力のテストでは差が出ないため、二者の差は遺伝子学上のものではないと思われる。また、熟通いをしていない子どもがほとんどいない時点でも差は現れている。

るので、放課後の学習も関係していない。

日本の教育が「創造性」を育てるのかどうかというところが指摘されているが、入念な研究はされていない。アメリカでは、学業達成とオリジナリティが結びついているが、日本では忍耐力が学業達成につながっているという指摘もある。しかし、あるテスト結果によると日本の子どもは基本的な技能よりも概念理解においてアメリカの子どもより非常に優れている。また日本の子どもの創造性をテストと教室での観察によって評価したポール・トランスは、アメリカの幼稚園教師が日本の幼稚園教師から学べき点はたくさんあると指摘している。他の西欧諸国の研究者も日本の小学生の読み、図工、音楽の達成度に感心している。日本の子どもは創造性は、数学や理科などの領域では花開き、他では衰えて行くのかも知れない。

また、日本の初等教育の欠点としては、協調することへの圧力、外国人や帰国子女を統合する際

の失敗、国際的な感覚を育てることができないこと、などが国内外から指摘されている。

初等教育から高等教育まで共通の特徴

国家統制

日本の学習指導要領では、技能に関してだけでなく感情や意欲に関連した目標も定められている。また、出版者が作った教科書を文部省が検定する。ある日本人研究者は、この検定制度は革新的な方法や論争の的になりそうな考えを閉め出すので効果的な検閲のシステムになっている、と主張している。

大規模なクラス

日本の学校のクラスの規模は徐々に小さくなっ



ているものの、アメリカの水準に比べると大きい。後の章で触れるように、日本の教授テクニクは大規模なクラスにうまく適合している。家族のような小さなグループがクラス活動の基本単位になっているため、大きなクラスでも円滑に機能することができるといえる。

能力別のグループ編成や学級編成を避ける

能力別のグループ編成や学級編成がないにもかかわらず数学や理科の国際テストで高得点をとるといふことは、アメリカ人にとっては信じ難いことであるが、日本では義務教育の間は能力や達成度によって生徒に差をつけることを避けている。また、出席している限りほぼ自動的に進級でき、落第や飛び級はない。

教師の威信

日本では教師の社会的威信と給料が高い。給料の高さがこの職業を続けることへの経済的な動機となっている。アメリカの教師（小学校と中学

校）の経験年数の平均は十三年であるのに対し、日本の教師の平均は十六・八年（小学校）と十七・五年（中学校）である。

教員組合の役割

アメリカ人がさらに驚くのは日本の教員組合、日教組の実質的役割である。日教組は過去四十年間にわたって日本の教育を形作るとともに、文部省と敵対し能力別学級編成や学力テストに反対してきた。

大学入学試験

日本の大学入試は「学校システム全体を動かす闇のエンジン」とも呼ばれている。大学入試の圧力は、就学前の子どもにさえかかっており、「エスカレーター」式の幼稚園に入れたがる親もいる。しかし、次章で触れるように幼稚園入試は非常に限られた現象で、おそらく幼稚園児のパーセントにしか関係していない。

（お茶の水女子大学大学院）

編集後記

今月号から九回シリーズで、昨年アメリカで出版された本の内容を紹介します。外から見える日本の教育の現状から、逆に考えることがいろいろと出てくるように思います。

*

三月二十六日の夜、「ねえ、百武彗星探しに行かない？」と小学生の娘を誘った。「エーッ今からー？」と驚きつつも、言いだしたら聞かない母の性格を知ってか、渋々のってくれた。星はほとんど見えない。暗やみを求めてウキウキとさまよう母とは対照的に「ねえ、こんな時間にウロウロしていると変な人に間違われるよ」と娘は至って冷静。それで

も構わず引っぱり回し、結局、学校へ。近くの友人宅で中学生の息子を誘うが「俺、理科苦手だから」と断られた。理科の勉強しようって言うてるんじゃないのになあと思いつつ双眼鏡を借りる。空ばかり見てるので、様々な物に「ほら危ない」と注意する役の娘。普段の私ってこんなに口うるさいんだなと苦笑してしまう。北斗七星を見つけた後は娘ものつてきて、ようやく百武彗星らしき星を発見した。TVや新聞の写真と違うので初めはがっかりしたが、だんだんそうに違いがないという気になって暗やみの中で二人ははしゃいでいた。本当にあれは百武彗星だったのだろうか。まあいいや。それに大人の楽しみにつき合わされることも、時にはあってもいいだろう。(田)

幼児の教育

第九十五巻 第七号

(一九九六年七月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成八年七月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二一〇一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五二一〇一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込 六一四一

☎〇三二五三九五一六六一三(営業)

☎〇三二五三九五一六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇二二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

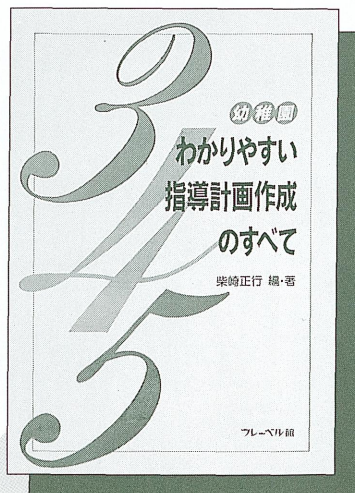
☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

新刊

幼稚園 わかりやすい 指導計画作成 のすべて



新しい幼稚園教育要領の
主旨に沿った、
年齢別指導計画。
◎年間指導計画
◎各月の月案例
（子どもの姿、保育のポイント付）
◎週案例・日案例
◎幼児指導要録の記入例
実践に基づく実例及び、計画立案の
プロセスがわかる解説付。
新しい保育観にそった実践のために
役立つ一冊です。



柴崎正行 編・著

B5判 304頁 定価2,600円(本体2,524円)

キンダーブックの
フレーベル館

倉橋惣三選集(第五卷)

上製本ケース付き B6変形判 512頁 定価3,500円(本体3,398円)

第五巻は、今まで単行本に収載されなかった雑誌への寄稿を集めた。その執筆活動は広く、児童教育、発達心理学、教師論、家庭教育、児童文化、そして随想、絵本など多岐にわたる。倉橋惣三の現代につながる先駆的教育論と、倉橋の全体像が把握できる一巻である。

倉橋惣三・著



わが国の幼児教育の理論を確立した倉橋惣三の教育論・随筆などを集大成した定本です。今でも保育界においては読まれ、語り継がれて保育者にとっては座右の書。

- | | |
|-------------------|---------------------|
| ①幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル | 定価3,000円 (本体2,913円) |
| ②幼稚園雑草 | 定価3,000円 (本体2,913円) |
| ③育ての心・就学前の教育他 | 定価3,000円 (本体2,913円) |
| ④保育案他 | 定価3,000円 (本体2,913円) |

上製本各巻ケース付き B6判 416~472頁

キンダーブックの
フレーベル館